

アフリカ狩猟採集民ブッシュマンの昔と今 —半世紀の記録—

田中二郎

京都大学名誉教授

1966 年以来、カラハリ砂漠で野生の動物を狩り、植物を採集して暮らすブッシュマンの生活と社会を観察調査してきました。石器時代を彷彿とさせる生活は、ボツワナ政府主導により 1979 年から定住化、集住化の道を歩むことになりました。1997 年にはついに故郷の地を追われて新しい居留地へと移住を強いられ、一千人を超える大集落で生活は激変しました。写真をお見せしながら、昔の狩猟採集生活とその後の大集落での生活へと急速に変容をきたしてきた様子を紹介します。

伝統的狩猟採集の生活

ブッシュマンは、南部アフリカのボツワナからナミビアにかけて広がるカラハリ砂漠で狩猟と採集による移動生活を営んでいる民族である。カラハリ砂漠は、不毛な外見上からは想像できないほど動植物相は豊かで、ブッシュマンは 100 種以上の植物を食用とし、動物についても哺乳類 33 種を始めとして、多数の鳥類、爬虫類、昆虫類を食物としている。捕獲がむずかしく収獲量の不安定な動物の狩猟に比べて、植物採集は容易で確実なため、食料の 80 パーセントは実は植物性食物に依存している。

飲料水の得られるのは雨季間の 30 日程度に過ぎず、年間 300 日以上期間、必要な水分を野生のスイカヤウリ科植物の根茎などに依存しなければならない。労働時間は予想外に少なく、1 人 1 日平均 3 時間半で、多くの時間を睡眠、休息、余暇に当てている。荒野での頻繁な移動生活は確かに過酷であるが、人々の生活は自然資源の確固とした保証の上に成立しており、その故に、この遊動的狩猟採集生活は何千年、何万年にも亘って営まれてきたのである。

ブッシュマンの社会は、身分や階級、職業などといった社会的分化はなく、平等原則によって成り立っている。分配や共同が徹底して実行され、その日暮らしを支える狩猟採集経済の基盤となっている。権力による支配や命令もなく、リーダーも存在しないが、社会生活は親族の絆と個々人の良識に基づく行動によって維持されている。さら

に、頻繁な移動に伴う開放的かつ流動的な集団の構造が、全体としての社会を永續させるための大きな役割を果たしているのである。

昔日の暮らしの風景、寸描

—2014 年 8 月 16 日開催「第 30 回雲南懇話会」講演録より—

草原、平原の中でもパンと呼ばれ、昔、水溜まりだった所が干上がって草原になっている。その周りがアカシアの疎林(woodland)になっています。ブッシュマンは、家を建てるにも薪を取るにも木が必要で、そういう木のある場所を選んで狩猟採集の生活をしています。

- ① 真っ直ぐ伸びる幹線道路、大地の起伏している様子が窺がえる(写真1)。荷物を満載した 10 トントラックの往来により、ジグザグ状の深い輪だちが生じ小型車の走行が厳しい。ひとたび豪雨となれば川となり、深みに嵌まり stuck したこともあった。現在はダイヤモンド景気で国が裕福になり、舗装されている。
- ② 1967 年 9 月、初めて訪ねたブッシュマンの集落(写真2)。アカシアなど樹木のあるところに建つ、ブッシュマンの小屋(住まい)(写真3)。
- ③ 狩りに出かけるブッシュマン(写真4)、道具一式、肩にかけている。カモシカの毛皮で作った袋で、その中に矢筒を入れ、弓を入れ、そして槍を差し込み、重要な「掘り棒」と火起し棒も入れている。犬を連れている。犬は昔からいたようです。



写真1 真っ直ぐ伸びる幹線道路



写真2 1967年9月、初めて訪問した集落



写真3 ブッシュマンの住居



写真4 狩りに出かけるブッシュマン



写真5 前日に毒矢を射込まれたキリンの足跡を追って行き、追いついた地点で更に毒矢を追加する。程なくしてどんと倒れた。



写真6 毒がまわって倒れこんだキリンに槍でとどめを刺す。



写真7 胃の内容物を絞って飲む。胃の内容物で手に付いた血のりを洗い落とし、内容物を飲む。水は彼らにとって貴重なので、胃袋の中身も重宝に使う。



写真8 獲物はその場で解体。
野営してしっかり乾かし、十分軽くしてから村に持ち帰る。

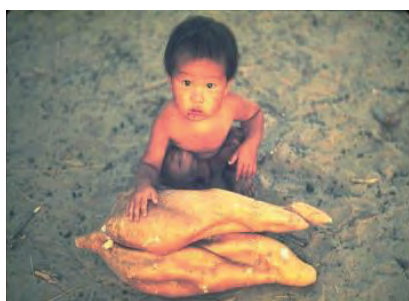


写真10 1歳の息子と根茎。「タベ」と呼ばれる根っこ。



写真12 小型カモシカのスティーンボックを罠で捕らえる。



写真13 ダチョウの卵を鍋で料理している。



写真9 植物採集する女性。彼らの食べ物として一番重要なのは、「根っこ」を始めとした植物！

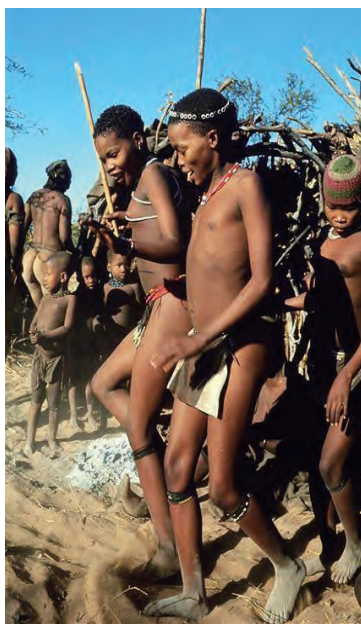


写真11 初潮（成人）を祝うEland（カモシカ）の踊り。



写真14 植物採集から戻ってきた女性がダチョウの卵で作った水筒から水を飲んでいる。



写真 15 スイカの多く実っているところで種子だけを集めて持って帰る。



写真 16 ハカマカズラ属の豆を莢ごと採集してくる。



写真 17 豆の莢は乾くと良い薪になる。



写真 18 火起こし。およそ1分で煙が出はじめ、火起こしは簡単な作業である。



写真 19 大きな焚火で熱した砂のなかへ、肉、メロン、根茎などを埋めて蒸し焼きにする。



写真 20 乳幼児は3歳ぐらいまで母親の完全な庇護のもとに育てられる。



写真 21 初潮を迎えた少女を祝うエランド（カモシカ的一种）の踊り。



写真 22 初潮を迎えた少女を祝うエランド（カモシカ的一种）の踊り。

- ④ ワナ猟・・・基本的には弓矢の狩りが獲物を捕る代表的な狩りです。もう一つの狩りにワナ猟があります。これは spring 代わりに灌木をもってきて地面に突き刺す。そこの先端からロープを引っ張って、その先端を輪っかにして、カモシカの足跡が集中する獣道に落とし穴を掘ります。前足が落ちたら輪っかが締まるようにします。スプリングが効いているから、ぶら下がって逃げられない。こういう形のワナ猟が二つめであります。

- ⑤ トビウサギ・・・トビウサギ (Springhare) ですが、日中は地面の中に穴を掘って、その中で寝ています。夜になると出てきて若い草を食べるという習性がありまして、トビウサギと言いながら実はネズミに近い動物です。カンガルーのように後足が発達していて、手はすごく小さい。後足でピョンピョン跳ぶんで Springhare と呼ばれています。さっき、竿がありましたね、4 m くらいの竿ですが、その竿の先に鉤フックを付



写真 23 ナミビアの岩山に描かれた壁画（エランドの踊り）。



写真 24
深さ 2 メートル近い
墓穴を掘る男たち。



写真 25 亡骸を墓穴へ運んでいき、みなで
順番に砂をかけて穴を埋める。



写真 26 むかし植物に覆われておらず完全な砂漠だった頃に、偏西風によって作られた緩やかな砂丘の跡が見られるが、現在のカラハリは千キロ四方にも及ぶ平坦なサバンナ乃至半砂漠である。



図 1 セントラル・カラハリ・ゲーム・リザーブ

京都大学アフリカ地域研究資料センター、インターネット連続講座；田中二郎「狩猟採集民ブッシュマンの定住化過程と問題点」より転載。



けてあり、これを穴に突っ込んで鉤で引っ掛けて捕まえます。ところが、引っ掛けても、ずるずる引っ張り上げようとすると皮がめくれて逃がしてしまいます。二人いれば、一人は引っ掛けたまま竿を保持して、も一人が掘り棒で真上から直径1m位の穴を掘ります。深い時は2mくらい掘り進んで漸く掘みあげてきて、掘り棒を棍棒代わりにして首根っこをガツンと叩きます。殺生といえばそうですが、いちいち動物殺すのを殺生と言っては彼らは生活出来ませんので、極めて冷静に平気で殺していきます（写真12）。

- ⑥ 駝鳥の卵・・・駝鳥の卵の1箇所に小さくきれいに穴を開けますが、ただ振っても出てきません。中身を掻きまわしてドロドロにしないと出てきません。その為には、木の枝を使って「く」の字型になるようにして、その棒で小さな穴から錐もみするんです。そして中を攪拌して中身をドロドロにしてやると黄身と白身が混ざってジャーっと出てきます。鍋で、かき回しながら煮ますとスクランブルエッグ（写真13）。大体1リットル位あります。殻はとても貴重な水筒になります（写真14）。このような水筒になるようなものは他にありませんから、卵は結構丈夫ですから、雨が降った時に大事に雨水を貯め、そして草なんかで詰めをして持ち運びます。

- ⑦ 女性の植物採集（写真9、10）・・・一番重要なのは、実は「根っこ（根茎）」です。カラハリの半砂漠は1年の大半が乾季でありまして、雨が降るのは12月から1月・2月の3ヶ月間位です。その間に偶には雨が降る。で、それ以外の時はずーっと雨なしです。乾季が深まって来ますと、もう緑が殆ど無くなってしまつて、根っこしか食べるものが無くなります。という時に役に立つのが掘り棒であります。

男が狩猟し女が植物採集する、そういう分業体制がかなりはっきりしています。男も偶には植物を採集します。木の実を摘んだり、掘り棒で根っこを掘ったりします。けれども狩りは男の専業です。食べ物、彼らにとって一番重要なのは根っこを始めとして植物なんです。植物が実は食物量の80%を占めております。

これスイカです（写真15）。多分我々の食べているスイカの原種は、カラハリ砂漠が一つ

の有力な候補地だったのですが、この野生のスイカを集めてきて持って帰るんです。多過ぎて持ち帰れない時は、割って種だけ持って帰ります。スイカの種は栄養があり美味しいですから、種だけを採取しているところです。

これはハカマカズラ属の豆（写真16）ですが、人類がサバンナで或いは woodland で進化していく時に、非常に重要な役割を果たしたであろうとされています。この豆をサヤごと運んで帰ってくるんです。これは大きなカモシカの毛皮をなめしたもので包んでふろしきにして持って帰って来るんですが、結構重いですよ（写真17）。何でサヤ毎持って帰るかと言いますと、このサヤはしばらく置いておくと乾いて薪になるんです。豆と一緒に薪も持って帰って来るわけですね。毎日毎日薪をくべて調理して、どんどん燃やしていきますが、一向に豆のサヤが減らないんですね。それくらいこの時期には集中的に豆を食べます。

野生キュウリの例です。キュウリの実の直径4～5cmのちっちゃいもので、ちっとも美味しくない。根っこに水と養分を蓄えているのです。これが乾燥地帯の特徴で、これを掘るために掘り棒が要る訳です。70～80cmは掘り進まないといけませんので、とても手では掘れません。

- ⑧ 掘り棒・・・大きなカモシカを捉まえると、正にラッキーで、大盤振る舞いで腹一杯食べますが、無くなれば、今度は根っこだけで1週間も2週間も3週間も過ぎなければいけない。そういう意味では、根っこというのは非常に重要です。その為の掘り棒、乾燥した草原に出て来ますと、掘り棒無しでは生存が不可能になります。特に乾季の10月・11月など、雨季のちょっと前ですね、雨が降る前の3ヶ月ほどの間は、掘り棒で根っこを掘らないと生きていけない。

掘り棒というのは、人類の進化の上で最も重要なものであったらと思います。元々は人間、直立2足歩行することによって人間になった訳ですね。2本足で立てたから頭が大きくなった。更に2本足で立つと前足が自由になるからこれを手として使えるようになる。手を使って細かい仕事をする。そうする

と相乗効果で益々脳が大きく発達します。そんなことで道具が出来る訳ですが、石だとか木の棒だとか、まず最初に手の延長の道具として使われたと思われます。そうしている内に偶々棒が折れて先が尖がって「あっ、これは掘るのに良いぞ!」ということで、掘り棒が出来たんでしょう。そしてこの尖った先を焼いて硬くしたり或いは骨や角や石を結び付けて、槍が出来てきたのでしょう。

- ⑨ 火起こしと灰の利用（蒸し焼き）・・・これは若い木を錐揉みしている。結構手が痛いです。けれども約1分で火が起きますからそんなに不便なものではないです（写真18）。

オキで砂を温めて、そこでトゲトゲのメロンを蒸し焼きにしている。同じようにこれは小さなワナで捕ったカモシカですね、スティーンボックというカモシカですが、これをやっぱり蒸し焼きにしている。灰というかカラハリの砂を上手にを使って、蒸し焼きにいたします（写真19）。

- ⑩ 子育て（写真20）・・・お母さんと子供。子供は3歳位まではこうやってお母さんと密着して育てないといけない。おっぱいも貰って。蛇やサソリのような猛毒のものがいる、鷹や鷲とかの猛禽類もいますし、ハイエナもいます。子供はほおっておく訳にはいきません。

- ⑪ 壁画に見るエランドの踊り・・・女性が大きくなって初潮を迎えた時には、お祭をやりま。その時の踊りがエランドの踊りなんです。普段の女性は、エプロンをしてその上から腰巻をしています。ところがこのエランド（Eland、カモシカ）の踊りをやっている時には、エプロンだけにして、毛皮の腰巻を取っ払って、この子（写真11、22）なんかまだおっぱい小さいですけど、おっぱいもお尻も丸出しにしてやります。エランドというのは脂がよくのっていて、彼らの豊穡、多産のシンボルなんです。だからこのエランドを模してエランドの踊りと言ってるんですが、こういう専用のビーズ細工で編んだエプロンをしたり、お尻にはエランドの尻尾を付けたりしています（写真21）。

これは2000年位前の、ナミビアのブランドバーグという山に描かれている壁画です（写真

23）。「女の学校」という名前が付けられましたが、実は学校なんかじゃなくて、エランドの踊りそのものだと、私は思っています。おっぱいを出して、お尻も丸出しにして、そしてエランドの尻尾をここに付けておりますね。正にエランドを象徴した女性の成人式を祝って踊った姿を描いているんだと思います。

- ⑫ 弔い・・・この人の奥さんが亡くなりましてですね。亡くなった人を彼女の毛皮のブランケットで包んで埋葬致します。大人の背丈ほど、結構深い穴を掘って、ハイエナなんかには食われないようにして、穴の中に埋葬します。穴を埋め戻した後に枯れ木なんかを置いて、彼女の使っていた洗面器や掘り棒も添えておりますが、死んだら後は砂に還って何も無くなってしまいます（写真24、25）。

定住化政策の導入

私が1966年以来調査していたブッシュマンの居住地、カデ地域に急激な変化の波が押し寄せてきたのは1979年のことであった。ボツワナ政府による開発、近代化の施策が最奥地である中央カラハリ動物保護区（Central Kalahari Game Reserve, CKGR）の中のカデ地域にまで、ついに及び始めたのである。

学校教育と近代医療が導入され、カデ地域に唯一掘られた井戸の周囲が定住地として整備されはじめたのである。大人数の人々が集まってきて定住生活をするようになれば、従来の狩猟採集生活は成り立たなくなる。狩猟採集の生活様式は、少人数の人々が広大な土地を移動することによって初めて成立しうるものだったからである。カデ地域以外からも多くの人々が移住してきて、居住地は数百人規模にまで拡大した。政府はトウモロコシ栽培とヤギ飼育を奨励したが、とても人々の需要を満たす収穫は期待できず、3か月に1度のペースで食料配給を実施した。狩猟採集から農耕・牧畜へ、平等分配から貨幣経済へ、そして、小さな遊動的キャンプの生活から何百人規模の定住生活への急激な移行。カデは歴史的な一大実験場となっていたのである。

定住化政策の実施は、小規模な集団による移動と離合集散を前提とし、全面的に自然に依存したいままでの暮らしを真っ向から否定し、未知の文

明を急激に押しつける生身の実験であった。政府は学校、診療所、宿舍、店舗などさまざまな建物をつくり、その建設や道路工事の作業には住民を雇いあげて現金収入の途をひらいた。大人たちには選挙権が与えられ、1984年の国会議員選挙でいきなり初めての国政選挙を経験することになった。

平等分配を基本として成り立っていた社会に、賃金労働や店舗という現金流通体系の一端が流入し、リーダーすらも欠如していた平等社会に、突如として国政選挙が押しつけられた。200人ばかりの顔見知りばかりで構成されていた小さな社会に、何百人という大人数が次々と押し寄せ、私空間の境界も定かでなかったキャンプは解体されて、匿名性を特徴とする都市的空間が一朝にして出現したのである。

再移住の強行

定住化政策は、1997年に断行された再移住によって新たな局面を迎えるにいたった。カデから町部に近い方向へ70キロ離れた地に政府は新しい居住地（ニューカデ）を建設し、人々の移住を促した。多くの人々は住みなれたカデの地を去ることに強く抵抗したが、農場地帯からカデに移ってきていた人々など、牛の飼育を望む一部の人たちが真っ先に政府の提案を受け入れた。牛の供与は政府が移住を促すために出した強力な交換条件のひとつだったのである。一角が崩れるとなし崩し的に移住への流れは怒涛を打った。減多にお目にかかったこともない多額の補償金をもらって引越しをしていく人々の姿を目の当たりにして、残された人々は次々とあとに続いた。4か月のうちに、カデは無人の地と化したのである。

カラハリの自然は荒々しく粗野で、人間が生活する場としては決して安逸なところではない。雨量は400ミリ程度で、夏には40度を越す酷暑になるかと思えば、冬の夜には氷点下10度を記録し、夜ごとに霜をみる。厳しい自然に融けこんで狩猟と採集の生活を営むために、ブッシュマンがどれほど見事に適応してきたか、その具体例をあげれば枚挙にいとまはない。彼らはすばらしい観察者であり、現実主義者であり、そしていかなる情況にも素直に対処できる都合主義者でもありつづけた。この即物的、情況主義的性向が、一旦ことあれば外界の変化にも巧妙に順応する力を発揮し

てきたといつてよい。

いま、最後の生き残りのブッシュマンたちの世界に重大な危機がもたらされている。1千人というかつて経験したことのない大集落が出現し、社会関係は具体的、直接的な人的つながりから、巨大な数と非現実的な集团的抽象へと移行しつつある。狩猟採集経済は破綻し、配給と年金に依存せざるをえない現金経済の世界へと足を踏み入れた。平等分配の基本原則是成立基盤を奪われ、価値体系そのものが根本的な変革を迫られている。定住化政策は、ブッシュマンたちが悠久の歴史を経てカラハリの自然の中で築きあげてきた絶妙のバランスを突き崩すきわめて深刻な矛盾に満ちたものであり、その導入はあまりにも性急なものであった。

ニューカデ集落の現況

当初は小さな診療所に看護婦が1人いるだけで、たいした医療行為もできなかったが、2005年には赤レンガの大きな病院が建設され、裏手には産婦人科病棟まで付設された。残念ながら、まだ医師は常駐しておらず、重症の患者はハンシーの町の病院まで救急車で搬送されていた。2010年になってついに医師、看護師が常駐するようになり、電気が供給されるようになって、産婦人科病棟では出産も可能になった。ただし重症の患者はやはりハンシーの病院へ送らざるを得ない状況にある。定住後に制度化された裁判制度も一応は機能し、社会に定着してきたようではあるが、それは建前であって、もめごとなど問題の解決は関係者と居あわせる人々の話し合いで図るという従来のやり方が依然として根強く機能している。

2000年からニューカデの集落で調査を続けてきた丸山淳子は、アフリカの「先住民」運動史における「ランドマーク」とも呼ばれたボツワナの土地裁判、および政府の対応に対する問題点、そしてその後の住民の動向について報告・分析しているので、その要点だけを以下（『』内）に紹介しておきたい。

『2006年、ボツワナ最高裁判所は、中央カラハリ動物保護区（CKGR）に居住していたブッシュマンが開発計画の一環で土地を追われたことを、「先住民」の権利の侵害であるとする判決

を下し、国際的に高く評価された。しかしながら、判決はCKGRに戻る人には政府サービスを提供する必要がないとし、さらに政府は裁判の提訴者189名のみにはCKGRへの帰還を許可したことによって、結果的にCKGR内では「伝統的な狩猟採集生活」、立ち退き先のニューカデやツェレなどでは「開発の恩恵を受ける生活」を強いられることになり、CKGRに戻れる人と戻れない人の間の溝が広がるといった問題が生じた。

この判決と政府の施策の中で、人々はどういうに対応していったであろうか。ニューカデでは、移住後3年目の2001年の雨季以来、定住地のプロットから数キロ～数十キロと離れたところにマイパーと称するブッシュ・キャンプを作りはじめ、そこで狩猟採集する人々が増えていった。プロットとマイパーを頻繁に往復し、伝統的な狩猟採集と開発の恩恵を同時に受けるこの生活パターンは急速に普及し、現在では住民の4分の1がマイパーに住み、プロットの親族、友人と緊密に交流しあっている。

移住手当の多寡、牛の貸与を受けられた人とまだ受けられていない人、また賃労働でよく稼ぎ得た人とそうでない人といった格差が開いていき、定住後35年、特にニューカデへの移住後16年を経て、こうした貧富の格差は一段と大きくなっている。一方でほとんど資産らしきものを持たない大多数の人々に対し、比較的少数の人たちとはいえ中古のトラックやロバ車を購入し、あるいは小さな店舗を開いて商売に励む人々も出てきた。

2010年時点でCKGRに戻った人たちは約200人と推定されたが、そのほとんどはCKGRの東方、ニューカデからおおよそ250キロメートルの遠方から来ていた人たちであった。この人々は、最後まで移住を拒み、CKGRの東部に残って生活を続けていて、「先住民」支援NGOが中心となって提訴の準備をしたときに真っ先に呼びかけられ、提訴者のリストに載った人々であった。250キロも離れた故地へ帰還できる人々はおおむね裕福な人々で、トラックに生活用品など一切合財を積み込んで移動し、狩猟採集を主生業として暮らしを立てている。彼らは比較的近いツェレ定住地へ1か月に3、4

度トラックで水汲みに行って渴きを満たしている。現在ニューカデを含むこれらの地域にはトラックが43台あり、その半数以上がCKGR東部への移動に用いられ、ツェレへの水汲みやニューカデへの短期訪問にも使われている。一方のニューカデ定住地では、前述のとおりマイパーのブッシュ・キャンプへかなりの人々が引っ越しし、プロットの人々と頻繁に交流している。こちらでは配給、年金、賃労働などを基本としながら、マイパーでの狩猟採集で食料を補充しているのである。』

「CKGRでの伝統的な狩猟採集生活」、「定住地での開発計画による近代的な生活」という窮屈な2つの場から、法や制度に抵触しないインフォーマルな活動がある程度は可能となつて、人々は誠に現実的かつ功利的に、まさしくブッシュマンらしいご都合主義者ぶりを発揮して、なんとかかよりうまい具合に立ちまわって暮らしをたてていっているというのが現状のようである。

カデの北方約40キロのツェーハオ周辺から西の方へハンシー農場北東部にかけてはツォイと呼ばれる豆がたくさん生えており、昔から豊作の年には泊まりがけで採集に行ったものだが、丸山によれば2012年はこの豆が大豊作で人びとは車で大挙して白人農場付近へ採集に出かけた。ハンシーからもブッシュマンが大勢採集に来ていて、一帯はブッシュマンたちの大集合が見られたという。車や携帯電話を使つての狩猟採集活動は資源の持続的な利用という観点からすると問題なしとはいえないかもしれないが、必ずしも近代化＝ツワナ化という方向ばかりへ進んでいる訳ではないことも確かである。さらに、携帯電話を使用するようになって日本からニューカデへの通話も可能となり、日本に居ながらにして現地と情報交換ができるなどグローバル化の波は留まるところを知らぬ勢いである。

狩猟採集民の知恵を学ぶ

人類の起源は最近まで500万年前と言われていたが、2001年に中央アフリカのチャドで発見されたサヘラントロプスが直立二足歩行をしていたことが判明し、一挙に700万年前まで遡ることになった。およそ1万3千年前（700万年の人類史

からみればほんの最近の出来事である）から農耕の、さらに約1千年遅れて牧畜の生産活動を始めた人類はどんどんと人口支持力を増大させ、産業革命を経て、エネルギー消費量は飛躍的に増加の一途をたどった。生あるものはいずれ滅亡へと向かう。それは自然界の摂理であり、地球上の生命の誕生以来40億年の間に99.9パーセントの種が減ってきた。人類はチンパンジーとの共通祖先から分かれて直立二足歩行するようになってから700万年といわれ、ホモ・サピエンスとなってからも約20万年が経つが、いずれは人類滅亡のときが来るのは疑いないことである。人類が生産手段を開発して人口を増大させ莫大なエネルギーを消費するようになって、自らを減らすスピードに拍車をかけていることも間違いない事実である。

ここで現れてきたのがクリーンエネルギーといわれてきた原子力の技術である。いま我々が直面しているのは、原子力が滅亡への加速を早めるのではないかという危機感ではないだろうか。私がブッシュマン研究の締めくくりに敢えて原発問題を取り上げるのは、偶々私がアフリカでブッシュマン調査中の2011年3月11日に日本の原発事故が起こったこととも無縁ではないかもしれない。現代文明にどっぷり浸かりきっている我々が今更狩猟採集生活の時代へと後戻りできるとは到底考えられることなく、人類はいずれ何らかの形で終末を迎えざるを得ないのは確かなことである。40億年の生命の歴史の中で何十億という生物種が死滅してきたことを考えれば、人類もいずれは絶滅することは疑う余地がない。原発が100パーセント安全であるとの確信を持ち得ず、しかも核燃料廃棄物処理問題も未解決のままの今日、絶滅への速度を原子力が加速する可能性は極めて高いと考えられる。

福島原発事故以後のドイツを始めとするヨーロッパ各国の脱原発の動きは非常に迅速であった。唯一被爆体験をもち、真っ先に脱原発を表明してもよいはずの当の日本の動きは非常に鈍く、そこには目先の経済優先の原理がまかり通っているとしか考えられない現実がある。人類の叡智を最大限発揮し、長期的な視野で資本を投入してでも安全な代替エネルギーの開発を図ることが緊急の課題なのではないだろうか。省エネルギーによる節電に加えて、太陽光、風力、波力、小水力、

地熱、バイオエネルギーによる発電などの再生可能エネルギーに置き換える努力が避けられない。人類の滅亡を少しでも遅らせようとするならば真剣に考えるべき課題である。

狩猟採集民ブッシュマンたちが持ち合わせていた、自然と一体化し、自然への信頼に立った生き方の、万分の1でも我々は見習うところがありはしないか。生物の一員としての人類は有限の地球資源の中でしか生きられず、人間と自然との永続的、持続的な在り方が模索されるべきであり、近代文明の見直しこそが必要な時ではなからうか。ブッシュマン研究はそうした意味でも我々が真剣に考えなければならない問題を多々含んでいると思われるのである。

参考文献

- 1) Tanaka, J.: *The Bushmen—A Half-Century Chronicle of Transformations in Hunter-Gatherer Life and Ecology*. Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2014.
- 2) 田中二郎『ブッシュマン、永遠に——変容を迫られるアフリカの狩猟採集民』昭和堂、2008。
- 3) 田中二郎『カラハリ狩猟採集民——過去と現在』（編著）京都大学学術出版会、2001。
- 4) 田中二郎『最後の狩猟採集民——歴史の流れとブッシュマン』どうぶつ社、1994。
- 5) Tanaka, J.: *The San Hunter-Gatherers of the Kalahari—A Study in Ecological Anthropology*. University of Tokyo Press, 1980.
- 6) 田中二郎『砂漠の狩人——人類始源の姿を求めて』中央公論社、1978。
- 7) 田中二郎『ブッシュマン——生態人類学的研究』思索社、1971、（新装版1990）。

Summary

The Bushmen: A Half-Century Chronicle of an African Hunter-Gatherer

Jiro Tanaka

Professor Emeritus, Kyoto University, Japan

I have been engaged in observational research since 1966 on the life and society of the Bushmen (San) who lived on hunting and gathering in the Kalahari Desert. Their migratory life by hunting and gathering which reminded us of the lifestyle of the Stone Age had begun to change rapidly to the sedentary life led by the settlement scheme of the Botswana Government in 1979. People of the Central Kalahari Game Reserve (CKGR) came together to live in the settlement from quite far place, probably as far as some 200 km away. The population of the settlement reached 600 in a few years. In 1997 people were moved again to the new settlement outside of the CKGR through the Development Scheme of the Government and the population of the new settlement increased to more than 1000. People obtained cattle from and were encouraged to cultivate corns and beans by the government but they cannot subsist on without the distribution of rationed food from the government. I analyze and introduce the process of these big socio-cultural changes from traditional hunting-gathering life to huge settlement life by showing pictures.